

中学校における教師の指導態度, 学級風土認知, およびアサーション生起の関係

小嶋佳子 (愛知教育大学)

キーワード: アサーション, 教師の指導態度, 学級風土

高橋 (2008) は, 学級場面におけるアサーション研究の課題の一つとして, 環境 (学級風土) の認知が社会的情報処理を経てアサーション生起に至るまでの過程が明らかになっていないことをあげた。そして, 中学生では「教師への親近感」の好意的な認知によるアサーション生起への影響はみられないことを示した。この結果に関して高橋 (2008) は, 中学生では教師の影響が減少することにふれていた。しかし, 「教師の親近感」には教師の受容的な指導態度とみなせるような項目と「罰」(三島・宇野, 2004 参照) とみなせるような項目が混ざっていたことも, この結果の原因の一つではないだろうか。「教師の親近感」を教師の指導態度の認知ではなく, 学級風土認知の一部として分析していたことも関係があるかもしれない。すなわち, 「教師の親近感」は学級風土の一部としてアサーション生起に影響するのではなく, 学級風土認知と社会的情報処理を経てアサーションに影響する可能性がある。そこで本研究では, 中学生を対象に, 社会的情報処理モデルの枠組みを踏まえて, 教師の指導態度が学級風土認知を介して, アサーション生起に至る過程を検討する。

方 法

調査対象者 中学 1—3 年生 103 名。

手続き 質問紙調査を行った。調査は学級単位で実施し, 対象者のペースで回答してもらった。質問紙には, (a) 教師の指導態度, (b) 学級風土認知, (c) 社会的情報処理・アサーション生起の各尺度を綴じた (a は三島・宇野 (2004) の「受容・親近」「自信・客観」の項目の表現を修正して使用。b は高橋 (2008) の学級風土認知項目のうち, 中学生のアサーション生起への影響が示された因子の項目をもとに作成。c は高橋 (2008) による尺度を使用。これは, 席替えの仕方についての担任教師の意見に対するアサーション場面と級友の意見に対するアサーション場面のそれぞれにおける社会的情報処理とアサーション生起を測定するものである)。

結果と考察

教師の指導態度は三島・宇野 (2004) に基づき「受容・親近」「自信・客観」に項目を分け, 得点を算出した。学級風土認知は高橋 (2008) に基づき「学級の規律正しさ」(以下, 学級規律), 「学級への満足感」(以下, 学級満足), 「学級活

動への関与度」(以下, 学級関与) に項目を分けて, 得点を求めた。社会的情報処理とアサーション生起も, 高橋 (2008) に基づき得点化した。

次に, 対教師, 対級友の場面別に, 教師の指導態度を独立変数, 学級風土認知と社会的情報処理を媒介変数, アサーション生起を従属変数とした共分散構造分析を行った。最終的に Figure 1 のモデルを採用した。図に示したように, 教師の受容的で親しみやすい指導態度 (「うれしいとき一緒に喜んでくれる」「話しかけやすい」等) も, 落ち着いていて客観的な指導態度 (「いつも落ち着いて堂々としている」「子どもが口答えや反抗をしてもしっかりと指導する」「子どもの意見を取り入れてくれる」等) も, 学級風土あるいは社会的情報処理 (主に目標の明確化の段階) を経てアサーションに影響を及ぼしていた。

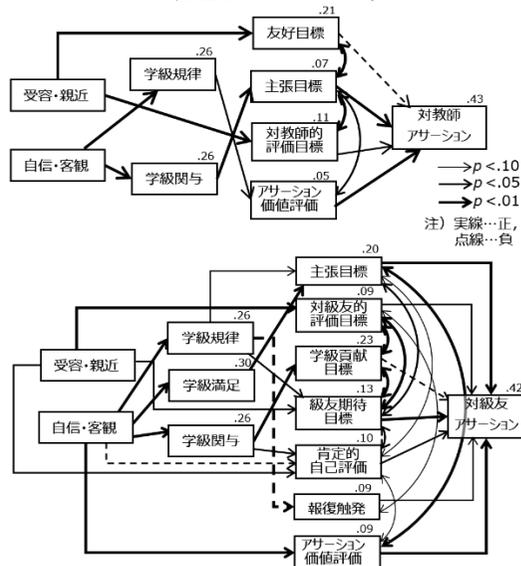


Figure 1 共分散構造分析の結果

引用文献

三島美砂・宇野宏幸 (2004). 学級雰囲気及ぼす教師の影響力 教育心理学研究, 52, 414-425.
 高橋 均 (2008). 学級における児童生徒のアサーション生起を規定する要因に関する研究 広島大学大学院教育学研究科博士論文 (未公開)

付 記

本研究は 2019 年度愛知教育大学卒業生前田純樹氏との共同研究である。